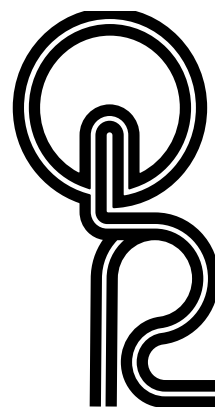


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 11 No.4, 2004



フィリピン群島には、海水準変動や地殻変動を示すノッチやサンゴ礁段丘がよく発達する。このダブルノッチはともに完新世中期に形成された。(サマル島ディビヌボで、前田保夫撮影)

Vol. 11 No. 4

August 1, 2004

2004年大会の案内(第4報).....3	50周年実行委員会議事録.....17
2004年大会プログラム.....7	幹事会議事録.....18
編集委員会からの案内.....12	会員消息.....19
ワークショップ等の案内.....13	国際惑星地球年の案内.....22
第四紀に関わる地質層序の新提案 (続報).....16	預かり金流用問題についての報告23

日本第四紀学会総会のお知らせとお願い

8月28日(土) 山形大会会場にて2004年総会が開催されます。総会では学会の活動に関する報告・審議のほか、2004年度論文賞受賞者選考結果の報告と賞の授与が行われます。会員各位のご出席をお願い申し上げます。

やむを得ず欠席される場合は、委任状(とじ込みのはがきまたはファックス)を必ずご提出ください。(庶務幹事)

ファックス送付の場合は8月25日(水)必着でお願いします。

Fax. 03-5273-4435

早稲田大学教育学部

日本第四紀学会庶務幹事 久保純子あて

総 会 委 任 状

2004年 月 日

日本第四紀学会総会議長殿

私は議長(または)氏)を代理人と定め、2004年度の日本第四紀学会総会におけるいっさいの議決権を委任します。

氏 名 () (署名または捺印)

所 属 ()

日本第四紀学会2004年大会 - 総会・研究発表(第4報)

一般研究発表・シンポジウム 日本第四紀学会
普及講演会 日本第四紀学会・山形県共催
会場 山形大学ほか

1. 日程の概要
一般研究発表, シンポジウム, 普及講演会, 総会, 評議員会, 懇親会, 巡検
2. 会場案内 山形大学 小白川キャンパス
3. 講演要旨集
4. 参加費
5. 懇親会
6. 大会プログラム
7. 総会
8. その他

1. 日程

2004年8月27日(金) 一般研究発表(山形大学 教養教育1号館1階)

- 9:15-10:30 オーラルセッション(○1-5)
- 10:30-10:45 休憩
- 10:45-11:50 ポスターセッション ショートサマリー(P1-32)
- 11:50-13:00 昼食・休憩(幹事会)
- 13:00-14:30 ポスターセッションコアタイム
- 14:30-17:00 オーラルセッション(○6-15)
- 17:00-19:00 評議員会

ポスター展示時間 9:30-17:00(山形大学 教養教育1号館1階)

2004年8月28日(土) 一般研究発表(山形大学 教養教育1号館1階)

- 9:00-10:30 オーラルセッション(○16-21)
- 10:30-10:35 休憩
- 10:35-12:00 日本第四紀学会2004年総会
- 12:00-13:00 昼食・休憩
- 13:00-13:30 ポスターセッションコアタイム
- 13:30-15:15 オーラルセッション(○22-28)
- 15:15-15:30 休憩
- 15:30-17:30 オーラルセッション(○29-36)
- 18:00-20:00 懇親会(山形大学 大学会館生協食堂)

ポスター展示時間 9:00-17:30(山形大学 教養教育1号館1階)

2004年8月28日(土) 普及講演会(山形国際ホテル・山形バスセンター隣)

- 主催: 日本第四紀学会・山形県
- 「活火山と活断層, 山形は大丈夫?」(一般公開)
- 13:00-16:30

2004年8月29日(日) シンポジウム(山形大学 教養教育1号館1階)

- シンポジウム 「活断層と盆地の形成」
- 9:30-16:30 シンポジウム講演(S1-8)

2004年8月29日(日) ~ 8月30日(月) 巡検

- 「新庄・山形盆地のテフクロロジーと活断層」
- 案内者 八木浩司(山形大学)ほか
- シンポジウム終了後に出発します。

巡検に申し込まれた方は会場受付で支払いをし、必要な資料を受け取って下さい。
(早めに受付に行ってください)。なお、野外見学会の詳細については第3報をご覧ください。

* オーラルの講演は例年通り1会場で行われます。発表時間は1件15分で質問時間を含みます。

ベルは1鈴10分、2鈴12分、終鈴15分です。2鈴で講演を終え、残り時間を質疑に充ててください。

* 液晶、スライド、OHPの各プロジェクターはそれぞれ1台ずつ、同時に使用可能です。

* スライドは発表30分前までに会場入口のスライド受付係に提出してください。各スライドには順番、上下左右を明記するか、あるいはご自分でマガジンに入れてください。

* OHPはご自分で操作して下さい。

* 液晶プロジェクターを用いた口頭発表の準備について

本大会会場ではMicrosoft PowerPointを用いた口頭発表が可能です。このために会場にはWindowsパソコンに接続した液晶プロジェクターを用意します。Microsoft PowerPointを利用する発表者は、発表前の休み時間を利用して液晶プロジェクターに接続されたWindowsパソコンにデータファイルをコピーしてもらう必要があります。

Microsoft PowerPointでの発表希望者は、データファイルを下記のファイル形式のUSBメモリースティック、Type IまたはType IIのフラッシュメモリーまたはPCMCIAメモリーカード、CD-R/CD-RWにデータファイルを記録して会場まで持参ください。発表時に極力トラブルのないようお願いいたします。特にMacintoshを使用の方は、事前にWindowsパソコンでの試行をお願いします。また、PowerPointファイルはできるだけデータ量の小さいものにしてください。

大会会場でのプレゼンテーション使用ソフト：Microsoft PowerPoint 2002

CD-Rのファイル形式：ISO 9660形式

パワーポイントを使用される方は、発表の1つ前のセッションが始まるまでにチェックを完了して下さい。初日の午前発表の方はできるだけ前日にチェックして下さい。

* ポスターセッションは縦180cm、横120cmのパネルが用意され、掲示は27日(金)9:30から29日(日)14:00まで可能です。なお、27日午後のポスターセッションコアタイムの時間には質問等が受けられるように、発表者はできる限りポスターセッション会場にいて下さい。

* ポスターセッション発表者にはオーラル講演の間(8月27日)に1件2分以内のショートサマリー発表の時間が与えられます。2枚以内のOHPを使って要領よくセールスポイントを伝えて下さい。ショートサマリーではスライドと液晶プロジェクターの使用はできませんので、ご注意下さい。

* ポスターセッションのその他の要領に関しては大会第3報を参照して下さい。

2. 会場案内

一般研究発表、シンポジウム、普及講演会、総会、評議員会：山形大学 小白川キャンパス
(〒990-8560 山形県山形市小白川町1-4-12, Tel: 023-628-4644)

懇親会：山形大学 大学会館生協食堂

山形大学への交通

JR山形駅から東方へ約2km。

JR山形駅前から東原経由千歳公園行きバス(約10分)で山大前下車。

あるいは山形駅前から県庁・千歳公園行きバスで南高前下車。そこから北へ徒歩約5分。

仙台から山形行きバスが約10分間隔で出ています。南高前で下車して下さい。

・車で来場される方は予め登録して下さい(先着15台)。

詳しくは、次ページの地図およびホームページ

(<http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>)を参照してください。

大会連絡先：陶野郁雄

〒990-8560 山形県山形市小白川町 1-4-12 山形大学理学部地球環境学科
e-mail: tohno@sci.kj.yamagata-u.ac.jp
Tel:023-628-4644 Fax:023-628-4661

大会実行委員会

実行委員長 陶野 郁雄（山形大学理学部教授・地球環境学科長）
実行委員 山野井 徹（山形大学理学部教授）
川邊 孝幸（山形大学教育学部教授）
八木 浩司（山形大学教育学部教授）
粕淵 辰昭（山形大学農学部教授・学部長）
阿子島 功（山形大学人文学部教授・学部長）
熊谷 晃（山形県OB）
田宮 良一（山形県OB）
松田 博之（（財）消防試験研究センター山形県支部長）
本田 康夫（金沢総合コンサルタンツ）
千葉 達朗（アジア航測）
長澤 一雄（霞城学園高校）

3. 講演要旨集

講演要旨集は会場で直接販売致します。定価は2,000円です。大会終了後、通信販売もいたしますので購入ご希望の方は、下記へお申し込み下さい。

（財）日本学会事務センター 事業部

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9 学会センター C-21
TEL 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822

4. 参加費

今大会では、参加費として2,000円を徴収します。ご協力をお願いいたします。

5. 懇親会

8月28日（土）18:00から

場 所：山形大学 大学会館生協食堂

参加費：一般5,000円，院生・学生2,500円

8月27日から第四紀学会会場で受付をいたします。

6. 大会プログラム

（7ページ以降を参照してください）

7. 総会

8月28日（土）10:35～12:00

場 所：山形大学 教養教育1号館1階

8. その他

評議員会は8月27日（金）の夕方に開催されます。時間および会場等の詳細については、学会事務局より各評議員に個別に連絡致します。

6. 大会プログラム

一般発表およびシンポジウムは115番教室、
ポスターセッションは学生用多目的室を予定しています。

2004年8月27日(金) 一般研究発表 オーラルセッション 1日目

- | No. | 講演時間 | 題目・氏名 |
|------|----------------|---|
| O-1 | 09:15-09:30 | 「北海道南西部，長万部付近にみられる段丘面の傾動と活褶曲運動」
吾妻 崇(産総研・活断層研究センター)・奥村晃史(広島大学)・後藤秀昭(福島大学)・黒澤英樹(応用地質株式会社)・信岡 大(応用地質株式会社)・三輪敦志(応用地質株式会社)・下川浩一(産総研)・寒川 旭(産総研・大阪センター)・杉山雄一(産総研・活断層研究センター) |
| O-2 | 09:30-09:45 | 「2003年に宮城県北部で生じた地震における液状化現象」
陶野郁雄(山形大学)・岡本英士(山形大学・院) |
| O-3 | 09:45-10:00 | 「重力探査を用いたモデル解析による断層の推定 越後平野西縁断層帯における例」
内藤信明(新潟大学大学院自然科学研究科)・卜部厚志・高濱信行(新潟大)・牧野雅彦・住田達哉・渡辺史郎(産総研) |
| O-4 | 10:00-10:15 | 「京都盆地における地下構造の三次元解析」
土志田正二・岡田篤正・竹村恵二(京都大学) |
| O-5 | 10:15-10:30 | 「亀岡断層帯(京都府)の第四紀断層運動と地下構造」
岡田篤正(京大・理・地物)・植村善博・東郷正美・竹村恵二・吉岡敏和・堤 浩之・梅田康弘・尾池和夫(京都府活断層調査委員会)・松井和夫・杉森辰次・園田玉紀・杉山直起・梅田孝行(ダイヤコンサルタント) |
| | <休憩> | 10:30-10:45 |
| | <ポスターショートサマリー> | 10:45-11:50 |
| | <昼食・休憩> | 11:50-13:00 |
| | <ポスターコアタイム> | 13:00-14:30 |
| O-6 | 14:30-14:45 | 「イラン南東部・バム断層の第四紀の活動と2003年12月26日バム地震による地表変位」
奥村晃史(広島大学文学研究科)・近藤久雄・吾妻 崇(産業技術総合研究所活断層研究センター)・越後智雄(東京大学大学院理学系研究科・日本学術振興会特別研究員)・カレド ヘサミ(国際地震工学地震学研究所) |
| O-7 | 14:45-15:00 | 「口永良部島の第四紀後期テフラ」
森脇 広(鹿児島大)・永迫俊郎(都立大研) |
| O-8 | 15:00-15:15 | 「雲仙火山の活動史と火山麓扇状地の発達過程 雲仙科学掘削計画の成果」
星住英夫・宇部浩三・松本哲一(産業技術総合研究所) |
| O-9 | 15:15-15:30 | 「霧ヶ峰火山における黒耀石の産出状況とフィッシュン・トラック年代」
杉原重夫(明治大学)・檀原 徹・山下 透(株式会社京都フィッシュン・トラック) |
| O-10 | 15:30-15:45 | 「白頭山の10世紀の巨大噴火による火砕流堆積物から採取した炭化樹木の ¹⁴ Cウイグルマッチングによる高精度年代決定」
中村俊夫(名古屋大)・奥野 充(福岡大)・石塚友希夫(名古屋大)・森脇 広(鹿児島大)・金 奎漢(韓国梨花女子大)・金 伯禄(中国吉林省第六地質調査所)・木村勝彦(福島大)・小田寛貴(名古屋大) |
| O-11 | 15:45-16:00 | 「富士相模川泥流堆積物の残留磁化と泥流の堆積様式・成因」
植木岳雪(産業技術総合研究所・地質情報研究部門)・山縣耕太郎(上越教育大学) |
| O-12 | 16:00-16:15 | 「富士火山の噴火特性を解明する上での広域テフラの重要性」
小林 淳((株)ダイヤコンサルタント)・高田 亮((独)産業技術総合研究所)・鈴木雄介(アジア航測(株))・石塚吉浩・中野 俊((独)産業技術 |

2004年大会プログラム

- 総合研究所)
- 13 16:15-16:30 「中央日本における鮮新 - 更新世テフラ層の広域対比 - 北陸地域と房総半島を中心に -」
田村糸子・山崎晴雄(東京都立大学大学院理学研究科)・水野清秀(産総研・活断層センター)
- 14 16:30-16:45 「関東平野南部の上総層群にテフラを供給した給源火山の推定とその第四紀前半の爆発的噴火活動」
鈴木毅彦(東京都立大学)
- 15 16:45-17:00 「中期更新世以降のテフラ層序に基づく岩木火山の噴火史」
斎藤 光・鈴木毅彦(東京都立大学大学院)
- < 評議員会 > 17:00-19:00

2004年8月28日(土) 一般研究発表 オーラルセッション 2日目

No. 講演時間 題目・氏名

- 16 09:00-09:15 「島根県神西湖堆積物に記録される完新世の水質変動と洪水イベント」
山田和芳・高田裕行・高安克己(島根大学汽水域研究センター)
- 17 09:15-09:30 「堆積物の微粒炭分析による琵琶湖周辺域における後期更新世・完新世のバイオマス燃焼の変遷」
井上 淳(大阪市立大)
- 18 09:30-09:45 「立山みくりが池年縞堆積物からみた過去2,850年間の環境変遷と最近の自然への回帰」
福澤仁之(都立大)・加藤めぐみ(科博)・安田喜憲(日文研)・奥野 充(福岡大)・中村俊夫(名大)
- 19 09:45-10:00 「北部九州, 檜原湿原における最近約1000年間の環境変動」
奥野 充(福岡大)・森 勇一・上田恭子(明和高)・此松昌彦(和歌山大)・中村俊夫(名古屋大)・長岡信治(長崎大)・稲永康平・鮎沢 潤(福岡大)
- 20 10:00-10:15 「有孔虫殻の酸素・炭素同位体比に基づく鹿島沖の過去14.5万年間の海洋環境変遷」
大場忠道(北大・院・地球環境)
- 21 10:15-10:30 「海水準上昇に伴う内湾の形成による深海域への堆積物輸送パターンの変化 - 伊勢湾 - 熊野トラフの例」
池原 研・大村亜希子(産総研・地質情報)
- < 休憩 > 10:30-10:35
< 総会 > 10:35-12:00
< ポスターコアタイム > 13:00-13:30

- 22 13:30-13:45 「越後平野の古地理的変遷」
鴨井幸彦((株)興和)・安井 賢(新潟基礎工学研究所)
- 23 13:45-14:00 「新潟平野の古信濃川三角州と平安海進」
平松由紀子・卯田 強(新潟大)
- 24 14:00-14:15 「最上川の成立過程と諸問題 - なぜそこを流れているのか -」
長澤一雄(霞城学園高校)
- 25 14:15-14:30 「第四紀は鮮新世の最終段階か - 600万年変動周期仮説 -」
吉村辰朗・間野道子(復建調査設計株式会社)
- 26 14:30-14:45 「扇状地のアスペクト比の地域的な差異」
坂井敬子(新潟大・院・自然科学)・卯田 強(新潟大・理・自然環境)
- 27 14:45-15:00 「鹿児島県出水平野に分布する鮮新 - 更新統の層序」
西山賢一(徳島大・総合科学)・長岡信治(長崎大・教育)・赤木 功(宮崎県産業支援財団)・藤原 治(サイクル機構)・新井房夫(故人)
- 28 15:00-15:15 「琵琶湖東岸平野における地下層序とその地史的背景」
大久保茂子(奈良女子大・院)・小松原琢(産業技術総合研究所)
- < 休憩 > 15:15-15:30

- 29 15:30-15:45 「千葉県北部，成田コアにおける下総層群の層序」
中里裕臣（農業工学研究所）・岡田 誠（茨城大学）・岡崎浩子（千葉県立中央博）・龍野敏晃（（株）ニュージェック）
- 30 15:45-16:00 「インドネシア・ジャワ島 Sangiran における磁気層序の研究」
藤本真司・兵頭政幸（神戸大学）・松浦秀治・近藤 恵（お茶の水女子大学）・熊井久雄（大阪市立大学）
- 31 16:00-16:15 「南半球 BEAGLE2003 航海で得られた海底地形と構造」
藤岡換太郎・徳長 航・木村 亮・奥村 智（GODI）・富士原敏也（JAMSTEC）
- 32 16:15-16:30 「新潟県新発田市アスファルト遺物のバイオマーカー分析」
佐々木榮一（石油資源）・吉岡秀佳（産総研）・田中耕作（新発田市教育委員会）
- 33 16:30-16:45 「青森市三内丸山遺跡で繊維土器が製作された理由 - 土器の化学成分分析による検討 - 」
松本建速（筑波技術短期大学非常勤講師）
- 34 16:45-17:00 「石器に利用された下呂石（湯ヶ峰流紋岩・岐阜県下呂市産）の広がり（2）
- 下呂石と他の石材との関わり - 」
岩田 修（岐阜県高山市立三枝小学校）
- 35 17:00-17:15 「大阪堆積盆の更新統におけるハリゲヤキ属（ニレ科）花粉化石の層序分布」
本郷美佐緒（新潟大学積雪地域災害研究センター）
- 36 17:15-17:30 「東アジアの第四紀タケネズミ類と新たに記載された絶滅種」
河村善也（愛知教育大学）
- <懇親会> 18:00-20:00

ポスターセッション

No. 題目・氏名

- P-1 「ODP 対応柱状図ソフト（D. M. D. ODP 版）の開発」
渡辺正巳・後藤啓光（文化財調査コンサルタント（株））・瀬戸浩二・高田裕行（島根大学汽水域研究センター）
- P-2 「関東山地三頭山ホルンフェルスの変成鉱物モードと変成流体相の研究」
加賀美英夫（城西大理）・谷口英嗣（駒沢大高校）
- P-3 「再来した土石流災害と斜面崩壊の特性 太宰府市四王寺山脈の事例」
磯 望（西南大）・黒木貴一（福教大）・後藤健介（西南大）・陶野郁雄（山形大）
- P-4 「浅間火山南麓に流下した岩屑流堆積物の分布」
吉田英嗣（東京大・学振特別研究員）・須貝俊彦（東京大）
- P-5 「北海道東部太平洋沿岸，厚岸町汐見川低地で確認された先史時代の津波痕跡」
添田雄二（北海道開拓記念館）・七山 太・古川竜太（産業技術総合研究所）・重野聖之・石井正之（明治コンサルタント（株））・熊崎農夫博（厚岸町教育委員会）
- P-6 「多摩川中流部河床に見られる上総層群下部の層序と堆積環境」
向山崇久（都立砧工業高校）・羽鳥謙三・松田隆夫（府中市役所）・増淵和夫（川崎市立日本民家園）・福嶋 徹（武蔵村山市議会）・高野繁昭（法政大学）・多摩サブ団体研究会
- P-7 「中国東部，太湖周辺低地における環境変遷 主に有孔虫群集に基いて」
吉田 誠・遠藤邦彦（日大）・鄭祥民（華東師範大）・稲葉将一・関本勝久（地質科学リサーチ）
- P-8 「オホーツク海南西部における最終氷期最寒冷期以降の古海洋環境復元」
小森次郎・福澤仁之（東京都立大）・池原 研（産総研）
- P-9 「南極半島近海に堆積した氷山砂礫の特徴から見た南極氷床の融解史」
能美仁博（東京大学）・横山祐典（東京大学）・三浦英樹（極地研）・大河内直彦（IFREE 4）
- P-10 「第45次日本南極地域観測隊（JARE - 45）で行った第四紀後期の東南極氷床変動に関する地形・地質学的調査の予察的報告」
三浦英樹（国立極地研究所），前李英明（広島大学），岩崎正吾（北海道大学）
- P-11 「雲仙火山南麓におけるATを挟在する黒ボク土の成因」

- 井上 弦 (鹿児島大院)・長岡信治 (長崎大)・杉山真二 ((株)古環境研究所)・西山賢一 (徳島大)・赤木 功 (宮崎県産業支援財団)
- P-12 「定量的植生復元方法を用いた日本の最終氷期最寒冷期以降の植生分布復元 - ()九州」
五反田克也 (東京都立大学理学部)・福澤仁之 (東京都立大学理学部)
- P-13 「北部九州, 脊振山地の雷山斜面から出土したカヤの樹木年輪」
瀬戸間洋平 (福岡大・院)・木村勝彦 (福島大)・奥野 充 (福岡大)
- P-14 「縄文時代の出土材にみるクリとウルシの選択的利用 東京都東村山市下宅部遺跡における杭材の樹種同定から」
佐々木由香 (パレオ・ラボ)・能城修一 (森林総合研究所)
- P-15 「東マレーシア・ランビル丘陵におけるフタバガキ科植物珪酸体の形態と運搬・堆積」
江口誠一 (千葉中央博)・山倉拓夫 (大阪市大)
- P-16 「南関東の縄文時代中期・後期貝塚における貝類の種別分布傾向とその評価 GISを用いた傾向面分析」
樋泉岳二 (早稲田大学)・津村広臣・建石 徹 (東京芸術大学)・西野雅人 (市原市文化財センター)・植月 学 (山梨県教育庁)・大内千年 (千葉県文化財センター)・Enrico R Creme (Bologna University)
- P-17 「韓国全谷里遺跡周辺における比抵抗調査」
井上直人 (京大)・黄 昭姫・相場 学・林田 明・松藤和人 (同志社大)・Kidong BAE (Hanyang Univ.)
- P-18 「火山灰稀産地域における、ほぼ同一時代に形成された河成段丘面の分布形態に関する研究 ~ 北陸地方東部の河成段丘群を事例として ~」
中村洋介 (立正大学)・岡田篤正・竹村恵二 (京都大学)
- P-19 「北野平野北部における Aso-4 火砕流堆積以降の段丘形成」
黒田圭介 (山形大学・院)・黒木貴一 (福岡教育大学)・加々島慎一 (山形大学)
- P-20 「宮城県川崎盆地における海洋酸素同位体ステージ 6 河成段丘の認定とその意義」
幡谷竜太 (電力中央研究所)・柳田 誠・佐藤 賢・佐々木俊法 (以上, 阪神コンサルタンツ)
- P-21 「北海道北部, 利尻山豊仙沢の氷河地形と石英を用いた氷河堆積物の OSL (Optically Stimulated Luminescence) 年代測定」
近藤玲介 (明治大学)・塚本すみ子 (東京都立大学)・青山雅史 (東京都立大学)
- P-22 「北海道の完新世テフラ層序」
中村有吾 (北海道大学)
- P-23 「羊蹄火山における最近 2 万年の噴火活動史」
星住リベカ (自由学園高等科)
- P-24 「OSL 年代測定を用いた八ヶ岳新期テフラの降下年代の再検討」
大石雅之・塚本すみ子 (東京都立大学)
- P-25 「韓国鬱陵島 U-4, U-3, U-2 テフラと日本海敦賀 1, 敦賀 2 テフラの対比と ^{14}C 年代」
椎原美紀 (西日本技術開発)・鳥井真之・奥野 充 (福岡大)・中村俊夫 (名古屋大)・金奎漢 (韓国梨花女子大)
- P-26 「福井県三方町の能登野層からの佐川 テフラの産出」
小松原琢 (産業技術総合研究所)・古澤 明 (古澤地質調査事務所)
- P-27 「大阪層群と上総層群における前・中期更新世テフラ層の対比」
長橋良隆・熊谷聡美・三浦郁恵 (福島大学)・小林聡子・奥平敬元 (大阪市大)・里口保文 (琵琶湖博)・吉川周作 (大阪市大)
- P-28 「伊予灘の海底地形と中央構造線」
大野裕記・西坂直樹 (四国電力)・池田倫治・小林修二 (四国総合研究所)
- P-29 「地表地震断層と深部起震断層について」
北田奈緒子 ((財)地域地盤環境研究所)・井上直人・竹村恵二 (京都大学)・香川敬生 ((財)地域地盤環境研究所)・岡田篤正 (京都大学)
- P-30 「深谷断層の活動時期: 吹上 大里地区ボーリング調査による検討 --」
水野清秀・杉山雄一 (産総研)・須貝俊彦・松島紘子 (東京大学)・八戸昭一 (埼玉県環境科学国際センター)・中里裕臣 (農業工学研究所)・細矢卓志 (中央開発)
- P-31 「千曲川 (信濃川) の流路形態を変化させた活断層」

- 東 慎治(新潟大)・卯田 強(新潟大)
 P-32「北部フォッサマグナ,犀川丘陵内における糸魚川-静岡構造線活断層系の活動に関連した地殻変動」
 田力正好(東大・地震研)・松多信尚(東大・空間情報)

普及講演会「活火山と活断層,山形は大丈夫?」
 直下型地震や活火山の噴火は予知できるか、災害を免れることはできるのか

- 主催:日本第四紀学会・山形県
 場所:山形国際ホテル
 (山形バスセンター隣接,山形市香澄町3-4-5,TEL:023-628-1313)
 日時:8月28日(土)13:00-16:30
 内容:以下の講演者と演題(仮題)を予定しています.
 活断層
 阿部勝征(東京大学) 日本の活断層と地震の予知
 長谷見晶子(山形大学) 山形の地震活動
 活火山
 岡田 弘(北海道大学) 日本の活火山と予知が成功した2000年有珠山噴火
 伴 雅雄(山形大学) 蔵王火山の噴火と災害
 フロアーディスカッション
 コーディネーター 五味陸仁(放送倫理番組向上機構・前TBS)
 実行委員長:陶野郁雄
 実行委員:田宮良一・千葉達朗・(山形県砂防課・消防防災課)

シンポジウム「活構造と盆地の形成」

- 日時:2004年8月29日
 会場:山形大学
 世話人:山野井 徹(山形大学理学部) 八木浩司(山形大学教育学部) 川邊孝幸(山形大学教育学部)

主旨説明:山野井 徹(世話人代表)(9:30~9:40)

<午前の部>「東北日本内弧におけるアクティブテクトニクス」

- 座長 奥村晃史(広島大学大学院文学研究科)
 コア・スピーカー(9:40~11:00)
 今泉俊文(東北大学大学院理学研究科)・佐藤比呂志(東京大学地震研究所):
 東北地方の活断層と変動地形 - 現状と課題 -
 吉田武義(東北大学大学院理学研究科):
 東北本州弧における火成活動史と地殻・マントル構造
 話題提供(11:10~11:50)
 川邊孝幸(山形大学教育学部):
 堆積盆地の埋積過程からみた東北日本中部のネオテクトニクス
 田力正好(東京大学地震研究所・特別研究員)・池田安隆(東京大学大学院理学系研究科):段丘の高度分布からみた東北日本の地殻変動

<午後の部>「盆地と外縁山地の形成」

- 座長 宮城豊彦(東北学院大学文学部)
 コア・スピーカー(13:00~13:50)

山野井 徹 (山形大学理学部):

山形盆地とその外縁山地の形成

話題提供 (13:50 ~ 14:50)

八木浩司 (山形大学教育学部):

蔵王火山および白鷹火山の巨大山体崩壊とその発生時期

杉山真二 (古環境研究所・宮崎研究所):

脊梁山脈山麓部丘陵地域における中期更新世以降の環境変遷

辻 康男・小畑 勝・辻本裕也 (パリノ・サーヴェイ (株))・森岡秀人 (芦屋市教育委員会): 兵庫県六甲山地南麓、芦屋川流域での完新世中期以降の扇状地形成と遺跡分布の変遷

総合討論 (15:05 ~ 16:20)

座長 山崎晴雄 (東京都立大学大学院理学研究科)

山形大会における編集委員会ブースの設置のご案内

- 「第四紀研究」投稿原稿の受付から印刷までの流れと、より良い原稿の作成のために -

「第四紀研究」編集委員会では、会員の皆さまに少しでも編集委員会の仕事内容をご理解いただき、数多くの「完成度の高い」論文を作成・投稿していただくために、種々の検討を行ってまいりました。この度、その活動の一環として、山形大会の会場において編集委員会のブースをポスターセッション会場の一角に設置いたします。ブースでは、編集委員会の仕事の説明として、投稿原稿を受け付けてから、査読・審査、受理に至るまでの過程や、受理後の原稿が印刷されるまでの過程をお示しいたします。また、分かりやすい原稿の書き方、見やすい図表の作り方など、「完成度の高い」論文作成のためのノウハウの一部をお伝えしたいと思います。ブースでは、編集委員・書記がお相手いたします。この機会に自作の図表をブースにお持ちください。より分かりやすい図表作成のために、有益な助言が得られること請け合いです。皆さまのおいでをお待ちしております。

編集幹事 小野 昭

第48回粘土科学討論会のお知らせ

- 1)主 催：日本粘土学会
 2)共 催：資源・素材学会，資源地質学会，ゼオライト学会，地盤工学会，日本化学会，日本火山学会，(予定)日本原子力学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本鉱物学会，日本セラミックス協会，日本セラミックス協会原料部会，高分子学会，日本第四紀学会，日本地学教育学会，日本地球化学会，日本地質学会，日本土壌肥料学会，日本熱測定学会，日本ペドロジー学会，農業土木学会(50音順)

3)会 期：2004年9月16日(木)～18日(土)

4)会 場：新潟大学五十嵐キャンパス，工学部
 (〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050)

5)日 程：

9月16日(木)

9:00-12:00 口頭発表
 13:00-14:00 特別講演
 14:00-17:30 シンポジウム
 18:00- 懇親会

9月17日(金)

9:00-11:00 口頭発表
 11:00-12:00 日本粘土学会総会
 9:00-12:00 ポスター展示
 12:00-14:30 ポスター討論
 14:30-17:30 口頭発表

6)講 演：

- A. 一般公演(口頭発表，ポスター発表)
 B. 会長講演 山岸皓彦(東大院・理)
 C. 平成16年粘土科学討論会シンポジウム
 「Claysphere Part 3：生活空間・身の回りの粘土 - 粘土圏環境における粘土の利用 - 」

シンポジウム趣旨：一昨年，昨年のシンポジウム(Claysphere Part 1, Claysphere Part 2)に引き続いて，本年度はICC 2005へ向けての最終シンポジウム「生活空間・身の回りの粘土 - 粘土圏環境における粘土の利用 - 」を開催します。このシンポジウムでは地球サブシステムを構成する粘土圏を身近な粘土圏環境としてとらえ，粘土・粘土鉱物が実際にどのような特性を応用し，どのように産業社会で使用されているかを議論します。また，循環型社会と粘土製品との関わり，ユーザーから見た粘土製品の評価などについて討論します。
 内容(いずれも仮題)次世代型建築内装材/合

成マイカ製品/セラミックス関連製品/高分子ナノコンポジットの材料特性/廃活性白土に残留する油脂のバイオディーゼル燃料への変換/化粧品と粘土鉱物

講演申込方法：日本粘土学会ホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/cssj2/index.html>)内の第48回粘土科学討論会参加申込用Webページ(J-STAGE)をご利用ください。講演題目，200字程度の講演概要等を入力していただきます。Webページが使えない場合は，下記あてお問い合わせください。

講演申込締切：2004年6月18日(金)12時。
 J-STAGEは6月2日から申込が可能です。

講演要旨締切：2004年7月23日(金)郵送必着。

7)懇親会：9月16日(木)18時から，新潟大学五十嵐キャンパス，生協第一食堂にて。

8)見学会：9月18日(土)

見学場所(予定)：中条羽黒山粘土鉱床，水沢化学，黒川村，クレーストーン博士の館(博物館)，胎内高原ビール園

見学会参加費：5,000円(前日宿泊費は除く)：
 支払い方法他は参加者に個別にご連絡します。

見学会申込締切：7月23日(金)

9)参加費：討論会参加登録費 会員・共催学会員 2,000円，学生会員 1,000円，非会員 3,000円，非会員学生 1,500円，講演要旨代金 3,000円，懇親会費 一般 5,000円，学生 3,000円
 講演は無しで，参加だけの方も，討論会・懇親会・見学会参加申込を，7月23日までに，必ず連絡して下さい。

10)討論会・懇親会・見学会参加申込方法：メールまたは，官製はがきに参加者氏名・所属・連絡先住所，e-mail addressを記入して，下記送付先にお送り下さい。

11)送付先・問い合わせ先：

〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050
 新潟大学理学部地質科学教室 赤井純治
 TEL. 025-262-6186，FAX. 025-262-6194，
 e-mail：akai@sc.niigata-u.ac.jp
<http://www.soc.nii.ac.jp/cssj2/index.html>

最終間氷期の古気候・古環境変遷を高精度で解明するワークショップのご案内

最終間氷期の気候変動や環境変遷を高精度で解明することは、氷期 - 間氷期サイクルをフルセットで理解する上で重要です。日本および東アジアにおいては、海成堆積物や湖沼堆積物を用いて、この問題に迫っている多くの優れた研究がありますが、適切な連続試料が乏しいこと、年代の決定の難しさなどがあって、必ずしも十分な精度での研究が進んでいるとは言えない面もあります。

そこで、以下のような企画で、最終間氷期の研究の現状と展望を語りあうとともに、長野市信更町高野でボーリングによって得られた約50m長のオールコア試料を素材にして共同研究を組織する相談の場を持ちたいと希望としております。お忙しい中とは存じますが、多くの方の参加をいただくようお願いいたします。

日時：2004年9月25日（土）午後～26日（日）夕方

場所：信州大学理学部（松本市旭3-1-1）

交通：信州大学ホームページ参照(<http://www.shinshu-u.ac.jp/>)

呼びかけ人：公文富士夫（信州大学理学部物質循環学科）、井内美郎（愛媛大学沿岸環境科学研究センター）

講演申し込み：講演者名、講演タイトル、希望講演時間、連絡先住所・e-mailアドレス

試料請求の場合：研究目的、試料深度範囲、試料間隔（1cm毎か5cm毎か）、研究期間

（試料の分割および配分につきましては9月26日の相談で決定しますが、参加者を優先いたします。）

宿舎等：各自で手配をお願いします。

問い合わせ・申込先：〒390-8621 松本市旭3-1-1 信州大学理学部物質循環学科

公文富士夫 Tel.& Fax. 0263-37-2479, E-mail: shkumon@gipac.shinshu-u.ac.jp

申し込み期限：2004年9月2日（単に参加するだけの方もご連絡下さい）

概要・スケジュール：

1日目午後～2日目午前 討論会「最終間氷期研究の現状と課題」

参加者からそれぞれの研究成果を持ち寄って、表記の課題に迫る。陸上堆積物、海洋堆積物（IMAGES）、湖沼堆積物などを用いた代表的な研究の成果も紹介して頂く予定。

2日目午前～午後 高野層のボーリング結果と対比：討論と研究計画立案

・公開するボーリング試料を前にして、高野層試料の対比や年代論について

・ボーリング試料の効果的な活用方法と今後の研究の進め方・試料の配分など

*参加を申し込まれた方には後日詳細な案内を差し上げます。

<ボーリング試料についての補足>

2004年6月10日から17日にかけてオールコア・ボーリングを行い、53mのほぼ完全に連続的な試料を採取しております。現在、それを半裁して記載するとともに、有機炭素分析、花粉分析、有機化学分析用として1cm毎に試料の分取を行っています。有機分析用試料は、-20℃で冷凍保存です。半裁の片側はそのまま残しており、上記の検討会でお見せします。

採取した柱状試料はほぼ均質な粘土質シルトからできており、時々テフラと砂層が挟まります。テフラの同定はこれからの課題ですが、これまでの露頭の観察から、AT、DKP、Aso-4、立山E、Aso-3、立山Dといった広域テフラが確認されており、高野層は、約3万年前から13.4万年前までをカバーしていると推定しています。

ボーリング試料の記載は日々進行中ですので、その概要は信州大学理学部物質循環学科の古環境変動研究室のホームページをご覧ください。

北淡国際活断層シンポジウム 2005 (第一報)

Hokudan International Symposium on Active Faulting 2005

阪神淡路大震災10周年に際して、第2回の北淡国際活断層シンポジウムを下記のとおり開催いたします。2000年の第1回シンポジウム同様日本と世界の活断層研究にインパクトを与える集会を実現したいと考えております。活断層研究とその応用、関連する地球科学諸分野からの一般研究発表を公募いたします。また、皆様のご来聴を歓迎いたします。

テーマ：地震災害軽減のための活断層研究

Research on active faulting to mitigate seismic hazards: the states of art

長期的地震危険度評価・地震ハザードマップ、活断層・古地震研究分野で世界の一線で活躍する活断層研究者をまじえたシンポジウムを開催して、兵庫県南部地震以降10年間の活断層研究の進展をレビューし、今後の展開を議論する。

日程：

2005年1月17日(月)～1月24日(月)

シンポジウム

1月17日(月) 受付, 追悼式参加

1月18日(火) 開会式, シンポジウム, ポスターセッション

1月19日(水) シンポジウム, レセプション, ポスターセッション

1月20日(木) シンポジウム, ポスターセッション, 地震研究所研究集会

1月21日(金) シンポジウム・パネルディスカッション, ポスターセッション

1月22日(土) 午前シンポジウム・公開講演会, 北淡町民との交流集会

四国巡検(中央構造線西部・室戸)

1月22日(土) 北淡町 高知

1月23日(日) 室戸岬周辺 池田

1月24日(月) 中央構造線西部 京都

発表形式：講演は招待講演に限り、ポスター発表を一般から募集します。

参加申し込み開始(2004年8月1日予定)

発表申し込み締切・アブストラクト締切(2004年9月30日)

場所：兵庫県北淡町(北淡町震災記念公園セミナーハウス・北淡町民センター)

宿舎：The Westin Awaji Island(1月21日まで)

参加費用(予定)：シンポジウム登録料：1万円、宿泊(上記宿舎で朝食付5泊+会場で昼夕食の場合)：6万円、巡検(招待講演者優先)：3万円、発表を行う大学院生・学部学生と一般参加者の一部には参加費の補助をいたします。

主催：北淡町、北淡町教育委員会、北淡国際活断層シンポジウム組織委員会

共催：産業技術総合研究所活断層研究センター、国際リソースフェア研究計画 タスクグループII-5、国際第四紀研究連合陸域プロセス研究委員会、ほか多数(交渉中)

北淡国際活断層シンポジウム組織委員会

会長：井高孝一(北淡町長)、副会長：Daniela Pantosti(イタリア国立地球物理研究所・ILP II-5 委員長)、松田時彦(東京大学名誉教授)、委員(略)

北淡国際活断層シンポジウム実行委員会

委員長：中田 高(広島大学文学研究科)、委員(略)

事務局：奥村晃史(広島大学文学研究科)、栗田泰夫・遠田晋次(産業技術総合研究所活断層研究センター)

問い合わせ先：奥村晃史 kojiok@hiroshima-u.ac.jp fax: 082-424-0320
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/~kojiok/hokudan.htm>

第四紀に関わる地質層序の新提案（続報） - 提案に対する INQUA 執行部の反対意見 -

Revision of the Geological Time Scale; Implications for the "Quaternary"

The International Commission on Stratigraphy (ICS) intends to extend the Neogene System to the present and eliminate Quaternary as a formal chronostratigraphic unit in the new Geological Time Scale. Brad Pillans, President of the INQUA Commission on Stratigraphy and Chronology, has made a proposal to ICS and INQUA to redefine the Quaternary as a Subsystem of the new Neogene System. Dr. Pillans' proposal has been circulated to INQUA members and the larger community of earth scientists interested in the late Cenozoic and is included in next issue of Quaternary Perspectives. An alternative position, advocating that we stand our ground and demand that the Quaternary be retained as a System separate and distinct from the Neogene, is presented in the same issue by Phil Gibbard, Chair of the ICS Subcommittee on Quaternary Stratigraphy.

The INQUA Executive Committee is concerned that ICS has not consulted representatives of the Quaternary community about its changes to the late Cenozoic part of the time scale. It would be prudent for ICS to defer any changes to the "Quaternary" until the Quaternary community has had time to more fully considered options and consequences.

Consultation is in progress and will continue, with INQUA's support, at IGC in Florence this summer and at the next INQUA Congress in Cairns, Australia, in 2007.

The INQUA Executive Committee asks that consider it's formal position on this important issue and the similar position of the International Association of Geomorphologists (IAG), both of which are given below.

Please express your views to the ICS Chairman (Felix Gradstein, felix.gradstein@nhm.uio.no) and Secretary General (James Ogg, jogg@purdue.edu), with a copy to John Clague, President of INQUA (jclague@sfu.ca).

The following is the position of the INQUA Executive Committee on the proposed revision of the Geological Time Scale.

INQUA insists that "Quaternary" be retained as a formal unit in the new Geological Time Scale. The Quaternary is in some respects the most important period in earth history, a time of major climatic, oceanographic, and biotic changes, and the appearance and evolution of the human species. Its importance is reflected in the fact that it has a strong interdisciplinary union (INQUA), that it is appreciated by scientists outside of the geological sciences, and that it is a doorway through which new approaches and ideas are introduced into geology. "Quaternary" is too important a term to be removed simply because it is may make the geological time scale tidier (the "Primary" and "Secondary" having been eliminated long ago, and the Tertiary shortly to follow). "Quaternary" is the bridge between humans and geology, and it provides an umbrella for bringing other important and fundable disciplines into the geological sciences.

In the interim, until this important matter is given full consideration by the Quaternary community, INQUA recommends that the "Quaternary" be retained as a System separate from the Neogene, comprising the Pleistocene and Holocene (the status quo). If temporary retention of the status quo is not acceptable to IUGS, INQUA recommends that ICS formally adopt Brad Pillans' proposal that the Quaternary be a formal Subsystem of the Neogene, extending from the beginning of the Gelasian Stage of the Pliocene to the present.

Through its consultation with the Quaternary community, the INQUA Executive Committee has found near-universal support for extending the Quaternary from its present lower boundary at 1.8 Ma to 2.6 Ma, the beginning of the Gelasian Stage. There is also widespread support for maintaining the

"Pleistocene" and "Holocene" as formal Series.

The International Association of Geomorphologists shares INQUA's concerns and has issued the following official statement, which is consistent with INQUA's position:

The International Association of Geomorphologists (IAG) has considered the proposed revisions to the Geological Time Scale by the International Commission on Stratigraphy. The IAG regrets the proposed elimination of the Quaternary as a system. However, if this change does take place then it supports the idea that within the Neogene a Quaternary Subsystem is established with a long time-scale (i.e. the last 2.6 million years). This would remove problems with regard to the placing of the Plio-Pleistocene boundary, and would reflect the major changes in the global environment which took place at 2.6 Ma (as recorded both in loess sections and in the deep sea oxygen isotope record.)."

(Pete Coxon)

第2回日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会 議事録

日 時：2004年4月24日(土) 14:00 ~ 16:30
場 所：東京都立大学理学部地理学教室8階研修室
出席者：熊井会長、真野副会長、渡邊、鈴木、河村、山崎

審議内容

1. 事業の進め方：

・残り時間は2年しかないので時間のかかることから先に進める。

2. 第四紀地図の改訂について：

・編集委員会(仮称)を作る。そのためには委員選定を含めて前回の委員に意見を聞いた。その結果、前回活躍した人には今回も委員になってもらう方が良い。

・出版社：著作権、英文化、出版助成金等の関係から、前回出版した東大出版会と協議する必要がある。

・内容：大幅な改訂は難しいが、ねつ造問題などでデータ修正が必要。

3. 特別展について：

大阪自然史博物館で「哺乳類の進化」を行うことになっており、これを人類・自然環境とのかかわり、進化の背景を入れて第四紀的にしてもらおう。第四紀学会から博物館を通じて大阪市に共催の申し入れをする。

4. 50年間の研究の総括：

・実際の作業は多大な労力が予想される。

・各分野の評議員に50年間の発展を論文として書いてもらう。INQUAダーバン大会で出した英文論文より厚くする。参考になるのは「日本の第四紀」。前回編集委員は成瀬洋・羽鳥謙三・貝塚爽平・吉川虎雄の各氏。

・著者は評議員またはその推薦者、付録として研究委員会を入れる。

・編集委員会を作る。

・タイトル・内容：「最近の第四紀研究の発展」。第四紀研究の論文を中心に研究の動向を紹介。意見対

立はやむを得ないので両論表記とする。

5. 国際シンポジウム：

・研究委員会に相談という方法がある。

・国際シンポジウムのテーマを持っているらしい会員に問い合わせる。

・成果公開促進費(科研費)を申請する必要がある。申請期限は来年の秋。

・各セッションの担当者を決めて、内容、講演者などの案を決める。

6. 募金について：

・募金の実施を2004年総会で予告する。また、50周年事業の実施体制についても報告する。

7. 普及のための双書・出版物等について：

・実行委員会名で企画・アイデアを募集する。実行委員会がおおよその枠(シリーズ名など)を示して個々のテーマについて第四紀通信に募集記事を載せる。

8. 次回予定について。

第3回日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会 議事録

日 時：5月29日(土) 14:00 ~ 17:00

場 所：早稲田大学 教育学部(16号館)5階

議 題：記念事業の具体的な実行について

出席者：熊井会長、真野副会長、岩田、久保、鈴木、中村、御堂島、山崎、渡邊

1. 前回の議事録確認

2. 報告事項

1) 第四紀地図：改訂についての編集委員就任依頼状況

2) 特別展：大阪自然史博物館での哺乳類進化に関する特別展：河村委員による大阪市との折衝について結果待ち。

3) 「日本の第四紀」の改訂版についての編集委員要請状況

4) 国際シンポジウム：具体案は今後検討。

5) 募金：記念事業の内容決定後に進める。

3. 審議内容

1) 第四紀地図

データベースとして価値のあるものを作成したらどうか、東京大学出版会と詰める必要有り。

第四紀地図編集の中心メンバーについて具体的な案を検討し、編集委員長として山崎会員とする。その他、データの改訂に加え、媒体を変えて新しさを強調する必要有り。活断層デジタルマップを見て構想、出版会との相談、編集委員会の体制を考えるべきことを確認した。

2) 普及出版物

最先端な内容を盛り込むためにもアメリカINQUA用のCD-ROM作成時のメンバーを執筆者に依頼する。大学・高校などの授業にも使えるようにCD-ROMも添付すること、学会の学史的なものは第四紀研究に持ってゆく案が示された。また、編集長候補者や調整役候補者に会長より打診することとした。

3) 国際シンポジウム

シンポジウム案を持っている可能性がある会員から情報を集めることとした。

4) 普及のための双書・出版物について

出版社をはじめから選定する。講談社、岩波ジュニア新書、東海大学出版会、PHPなどで可能性を考える。

今回は7月3日(土) 14:00 ~ 都立大学

2003年度第7回幹事会議事録

日時：2004年5月22日(土) 14:00-16:30

会場：早稲田大学教育学部 16号館5階512演習室

出席者：熊井久雄(会長)、山崎晴雄、松浦秀治、池原 研、斎藤文紀、奥村晃史、河村善也、中川庸幸(学会事務センター)、久保純子(記録)

欠席者：真野勝友(副会長)、小野 昭、兵頭政幸

議 事：

1. 報告事項

庶務(久保)

前回議事録の確認：第四紀通信3号に掲載

会員動向 2・3月分：通信3号に掲載

受入図書(6件8冊)

本年度発行の名簿に掲載する関連学協会連絡先を確認した。

研究委員会申請は現在のところ1件。現行の委員会については、6月末日までに報告するよう依頼する。

第2回50周年事業実行委員会(4/24開催)報告(山崎幹事長より)

学会賞選考委員会(メールによる審議)で大場委員が委員長に選出された(山崎幹事長より報告)。今後、審議のための資料(対象論文のリスト、著

者が会員かどうかの確認等)を庶務が準備する。地質学研連アンケート(若者の理科離れ、ならびに国際惑星地球年について)の各学会の回答集計結果(町田研連委員長より庶務へ報告)

会計(松浦)

通常の支出報告(会誌印刷・会報発行等)および3月末現在の試算表については特段問題なし。会員名簿の広告依頼の回答状況報告。

編集(池原)

編集・刊行状況の報告。

山形大会における編集委員会ブースの展覧(よりよい原稿・図表のかきかた)を検討中。

行事(斎藤)

山形大会の詳細(巡検、シンポジウム、普及講演会など)

2005年大会開催地について、島根大学より内諾が得られた。

広報(兵頭：欠席)

第四紀通信 Vol. 11 No. 3(全16頁)の編集を完了し、現在印刷中。

渉外(奥村)

2006年国際惑星地球年(IUGS-UNESCO International Year of Planet Earth)準備委員会報告

2004年9月の国連総会で中国が発議の予定。

地球惑星科学関連学会連絡会報告。

企画(河村)

講習会・ミニシンポジウムについて検討中。

2. 審議事項

・名簿の掲載学協会の法人表記方法について確認した。

・地すべり学会の文献引用依頼は記載事項に誤りがあるため返却する。

・学術会議アンケートへの回答(学会の倫理綱領について)

・山形大会における編集委員会展覧に伴う編集書記の旅費支出を承認

・渉外関係

IYPE 実行委員会委員：斎藤幹事に依頼

地球惑星科学関連学会連合『地学教育』WG 委員

員：熊井会長より会員に依頼

地球惑星科学関連学会連合連携WG委員：奥村幹事に依頼

・講習会について

骨の講習会、デジタルマッピング、「イラストレーター」講習などの案が出された。

・ミニシンポジウムについて

(案)2005年1月頃、阪神淡路大震災から10年「変わる日本の地震防災」

・国際層序委員会による第四紀の呼称廃止(第四系をネオジンのサブシステムとする案)に対し、INQUA執行委員会が反対の意を表明した背景が熊井会長より紹介されたが、くわしい解説を「通信」に紹介していただくよう依頼。

次回幹事会は7月10日、次回は8月7日開催の予定。



国際惑星地球年

国際的な地球科学の新計画、国際惑星地球年を成功させようという勢いが高まっています。この計画は世界の117ヶ国が加盟し総勢25万人の地球科学者を代表する国際学術団体、国際地質科学連合IUGSによって構想企画されたものです。ユネスコの地球科学部門の全面的な支援が約束されていますが、そのほかにIUGSと専門性の近い国際学術団体^(注1)からも後援が表明されています。さらに、中国、インド、ロシア、アルゼンチン、ブラジル、ヨルダン、イタリアなどの政府からも支援が約束されています。科学的な面からはこのほかにもさらに多くの後援が期待されます。

この国際年の目標は、副題の「社会のための地球科学」からも分かるように、人類と地球の永続的な将来を築くためには、地球科学のもっている知見が重要な鍵を握っていることをさらに深く理解してもらうことです。人類と惑星地球の関係をもっともよく知っているのは地球科学だからです。

公的な国際年そのものは2006年に設定していますが、準備や結果のまとめのためにその後1年づつを加えて、計画は2005年に始まり2007年まで続ける予定です。これはこれまで企画された国際年計画の最大のものの一つになるでしょうが、そのために2000万ドルの資金調達が必要だと計算され、そのための資金調達が計画されています。この資金は科学的な研究のためと、対外的な活動のために折半して使う予定です。対外的な活動にはいろいろありますが、教育や広報も含んでいて、この地球年の主要なメッセージと研究活動の成果を、メディアを通じて地球上にすむ世界中の何十億もの人々に届く路を開くのに使われるでしょう。

この計画が最初に企画されたのは2001年のことで、IUGSとユネスコから初動資金が提供されて始められ、数年の準備計画期間の間に計画の全体像が次第にはっきりしてきたものです。現在はウェブサイトwww.esfs.orgを開設して直接計画の内容や進展状況に接することができるようになってきましたし、きれいなパンフレット「惑星地球をわれらが手に(Planet Earth in our Hands)」も発行されています。どちらからでも、科学的な研究として設定された8件の研究テーマが読めるようになってきました。またポスターも作られつつあり、じきに世界中のどこでも種々の会議や会合に使えるようになるでしょう。

この国際年の標的は研究テーマに示されてはいますが、これで決まりというわけではなく、これ以外にも草の根の研究者からの提案にすぐさま答えるよう、柔軟に運営されることになっています。現在挙げられている研究テーマは、地下水、災害、地球と健康、気候、資源、深部地球、海洋および巨大都市の8項目ですが、これらは社会的なインパクトの大きさ、社会への働きかけの強さ、学際性の程度、科学的なポテンシャルの高さなどを考慮して選定されたものです。このほかに、人類が直面するもう一つの重要な問題である土壌の問題を第9番目のテーマとして加えることもできるでしょう。

地球科学界の外に対する対外活動については、この惑星地球年がねらっている中心的なテーマが一般社会に浸透するような計画。たとえばインターネットを通じてアクセスできる教育資源の作成から、関連する芸術作品の制作依頼にいたるまで。対して、惑星地球年が基金を提供する母体となるように運用することが考えられています。これは科学的な研究計画の場合も同様で、外部からの財政援助をもとにたてられる資金運用計画もこの惑星地球年で行います。こうして実際に行われる地域的な事業が、国際的な一貫した方針のもとで行うことができるようになるでしょう。

現在この国際年の計画委員会は、8月にフィレンツェで開かれる第32回IGCまでに科学研究計画の計画書を完成させるよう、またこの8月に開かれる国連総会に先立って各国政府

の支持を取り付けられるよう、努力を続けています。国連総会では中国がこの惑星地球年を国連の正式な活動「国際年」の一つとするよう提案することになっています。この提案の支持が世界中の政府から得られるよう、少なくとも明白な反対がないよう、関係者一同は各国政府に働きかけを続けています。

この意欲的な計画についてもっと詳しいことを知りたい方は、www.ests.orgを訪れてください。(2004年6月)

(注1) 国際測地学地球物理学連合 IUGG、国際地理学連合 IGC、国際土壌科学連合 IUSS、国際リソスフェア計画 SCL-ILP、さらに国際科学会議 ICSU も支持している。

学会事務センターによる預かり金流用問題についての報告

新聞報道されました学会事務センターの預かり金流用問題について、7月10日(土)13時から東京一ツ橋の学士会館において説明会が行われました。事務を委託している各学会から関係者200名ほどの参加者があり、本学会からは幹事長の山崎と松浦会計幹事が出席しました。事務センターからは光岡理事長、木田会長、寺尾専務理事、山口常務理事が出席し、お詫びと今回の事態に至る経過、そして、今後の再建案等が資料に基づいて説明されました。預かり金の目的外使用による不足額は総額約8億円であり、合理化等を通して7年でこれを回収する案が示されました。また、危機を回避するため各学会に対して預かり金を学会事務センターから引き上げないよう要望が出されました。これに対し参加者からは、流用に関する事実の説明や責任追及が不十分である、示された再建案は現実性が乏しく改善が期待できず受け入れがたい、などの意見が強く出されました。このため、光岡理事長は1ヶ月以内に納得できる再建案を再度提出することを約束しました。

なお、日本第四紀学会が学会事務センターに管理を依頼している定期預金・普通預金はすべて会長名義であり、全額が保全されていることが確認されています。

(山崎晴雄記)

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会

神戸大学内海域環境教育研究センター	兵頭政幸
神戸大学大学教育研究センター	松下まり子
福島大学教育学部	後藤秀昭
編集書記	岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr>から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。